

SMC金融・経済マーケットレポート

Reporter Your Financial Brain SMC 豊島 健治

所を変えて「歴史は巡る」 (金融機関と資金繰り)

170億ドル(約1.7兆円)がたった1日で枯渇してしまった 米国第5位の証券会社ベアー・スターンズはこうして破綻寸前に追い込まれ、紙切れ同然の値段でメリル・リンチに買収されました。この事実は「金融機関の資金繰りがいかに脆いものか」をいみじくも語っています。

大分昔の話で恐縮ですが、銀行員時代の最後の時期、銀行全体の資金繰りを見る立場にいました。実務は東京にいる担当が行っていたのですが、報告を受けたり関係各所を訪問したりする中で、銀行の資金繰りがどのように成り立っているかを肌で知ることができました。

その中で解ったことは、銀行の資金繰りは「金融機関相互の短期的信用」の上に成り立っているという事実でした。幸いなことに、現役時代に資金繰りの恐怖を実感することはありませんでしたが、その恐怖が現実となった時期が日本にも出現しました。あの「97年11月」です。

「97年11月」は、日本が金融恐慌一歩手前まで追い込まれた年月として私の記憶に強く残っているのですが、その発端は11月10日の短期金融市場に於ける三洋証券のデフォルト(債務不履行)発生でした。

その日を境に短期金融市場が凍り付き、短期資金の出し手が市場から忽然と消えてしまったのです。そして、1週間後の17日には拓銀が、23日には拓銀幹事証券の山一証券が事実上の破綻に追い込まれ、全国の問題銀行が「静かな取り付け」に襲われたのです。これは推測ですが、その様を見て全ての金融機関資金繰り担当者・担当役員は青くなり恐怖を味わった筈です。

短期金融市場とは、日本銀行に当座預金を持つ金融機関が、日々の資金繰りを調節する市場を云います。といっても一寸解りにくいと思いますが、金融機関は毎日(特に決済が集中するゴトウビと呼ばれる5や10のつく日)資金が激しく出たり入ったりします。出て行く金額が多い時には資金が不足し、入ってくる金額が多い時は資金が余ります。資金繰り担当は、その日々の資金の出入りを予想し日銀当座預金に資金不足が起こらないようにします。しかし、予想通りに進むことはま

ずありません。急に大口の出金が多なったり思わぬ大きな入金があったりすると予定が狂います。その狂いや資金出入りの凸凹を調節する市場が短期金融市場と思って下さい。

銀行は資金が余剰となれば1日単位で運用に回し(日銀当座は無利息なので少しでも利息を稼ぐ)、不足すれば余剰の銀行等から1日単位(半日もある)で借ります。それを仲介するのが短資会社と呼ばれる専門会社ですが、そうした金融機関相互の資金の遣り取りが円滑に進むよう資金流通量をコントロールしているのが中央銀行である日本銀行、日銀です。

今回、サブプライム問題で、最初は欧州中央銀行(ECB)が、2回目はFRBとECBが協調して、市場に数十兆円規模の巨額資金を供給したと伝えられました。何故過剰流動性が云々される状況下で中央銀行が巨額資金を供給するかと云うと、それは正に短期金融市場に流れる資金量を増やし資金調達に困る金融機関が出ないようにするためと云えます。

巨額資金を供給すれば自ずと資金余剰となる金融機関が増加します。そうした金融機関は余剰資金を運用に廻す筈です。そうしなければ利息は稼げません。しかし、にも拘らずベアー・スターンズには余剰資金は届きませんでした。何故なら噂が噂を呼び信用に「？」マークがついたからです。そして恐ろしいスピードで資金が枯渇しました。

一旦、市場で信用を失った金融機関にお金を出す(運用する)金融機関はいなくなります。当然乍ら、資金を出していた金融機関も資金の引上げに掛かります。1日単位で期限の来る債務を抱えている金融機関が保有する資金はあっという間に枯渇するのです。ベアー・スターンズのように、昨日は1兆円あったとしても今日にはそれがゼロになってしまうということは「ありうる」世界なのです。

今、いや昨年から、欧米の金融機関は資本増強にやっきとなっています。金融機関の信用を補完する唯一の方法は自己資本を増やすことです。巨額赤字、あるいは赤字疑惑に耐えられるだけの増資をしなければ資金が逃げてしまうという恐怖に晒されているのです。10年前、日本の金融機関が味わった恐怖に、今欧米の金融機関が襲われているのは「歴史の皮肉」でしょうか。